

## 本の中のサツマイモ(6)

<林 英夫・芳賀 登篇『番付集成(上・下)』柏書房>

元 川越サツマイモ資料館長

いのうえ井上

が治

## \* 相撲番付見立の番付

江戸時代後期から大正期にかけてのことである。相撲番付にならった木版一枚摺りのさまざまな番付が出回った。それは上方や江戸・東京などに限らず、全国の中小都市からも出ていたから、総数はわからない。『番付集成』の編者でさえ、見ることができたのは4千種ほどであったという。

その多くは制作者名がない。版元の名もない。そして発行年がわかるものも少ない。その構成は四段組みが多い。紙面の真ん中に、東方と西方を分ける縦長の広い場所がある。そこに「後見」・「差添人」・「行司」・「勧進元」などの大きな文字がある。

最上段に、だれもが納得できるはずの大物を並べる。最下段にもよく知られているものを並べるが、その多くは小物であった。それでもときにはそこに珍しいものや、新しいものが現れることがあった。サツマイモの初出もその好例の一つであった。

本稿の最後に載せさせてもらった「天保 時代名物競」の中の「川越 薩摩芋」がそ れである。

この番付ほど発行年代が明らかなものは 珍しい。しかも後見人を幕府老中であった 水野越前守忠邦とし、失敗した天保の改革 を皮肉っているものはない。水野越前とい えば、贅沢禁止・勤倹実行の「天保の改革」 を強行した人物だった。だが、結局は失敗 し、失脚しているからである。

## \* 川越芋が見立番付に出たわけ

川越いもの主産地は武蔵野台地の中にあった旧川越藩領の村々であった。そこのサツマイモも、最初は農家が飢饉に備えて作っておくものであった。だが、食べてみれば甘くておいしいし、腹の足しにもなる。それですぐ普段の日の、自家用食の一つとして本気でつくるものになった。

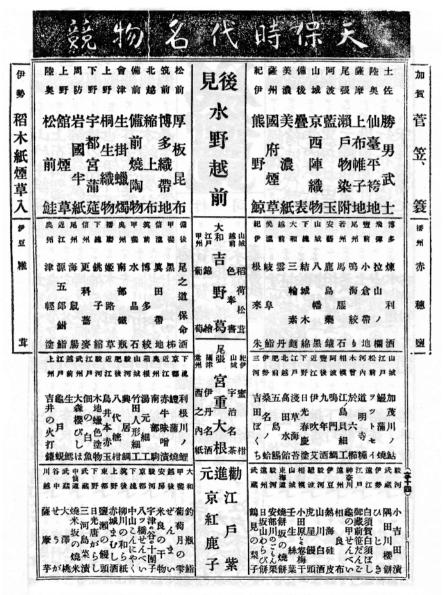
それがやがて江戸に現れた焼き芋屋が繁盛したおかげで、その原料いもの供給地になった。

川越には1989(平成元)年から2008(平成20)年までにかけて、サツマイモ料理専門料亭「いも膳」の主人、神山正久さんが私費を投じて建設し、運営費も負担していた「サツマイモ資料館」があった。入館料なしの同館初代館長は川越いも友の会事務局長、山田英次さんであった。わたしはその後任として1992(平成4年)から2008(平成20)年まで、2代目館長として勤めさせてもらうことができた。

それで『番付集成(下)』の最初のページにある「天保時代名物競」をコピーし、展示室の目立つところに張り出しておいた。すると、さまざまな反響があった。特

に鹿児島県方面からきてくれた人たちから の質問で多かったのはこういうことであっ た。

「日本でサツマイモの本場といえば鹿児島のはずなのに、なんで川越なの?」 それに対しては、こう説明させてもらったものである。 「おっしゃるとり、わが国のサツマイモ 生産量で最大なところとなれば、鹿児島で す。でもそちら産のものの多くは自家用 だったようですね。商品作物としてではな かったから、名物番付作者の目に止まらな かったのではないでしょうか」と。



林英夫・芳賀登編:『番付集成』下巻(柏書房、昭和48年)所収。 最下段の左端に「川越 薩摩芋」とある。